

書評

今田絵里香著

『「少年」「少女」の誕生』

(ミネルヴァ書房／2019)

福田委千代



本書は、少年少女雑誌の誕生およびその変遷と併せて、少年少女雑誌における「少年」「少女」の誕生と変遷を明らかにすることを意図して書かれた。そのため、明治・大正・昭和に出版され、それぞれの時代の多くの少年少女たちに支持された、博文館刊「少年世界」「少女世界」、実業之日本社刊「日本少年」「少女の友」、大日本雄弁会講談社刊「少年倶楽部」「少女倶楽部」を主な分析対象として扱っている。

本書の構成は三部に別れており、第Ⅰ部は「「少年」「少女」の起源」として子ども向けメディアの成立と分化過程を、第Ⅱ部「「少年」「少女」の展開」では少年少女雑誌におけるコンテンツの分析から「少年」

「少女」の意味していたものを抽出し、第Ⅲ部「「少年」「少女」の変容と解体」において、「少年」「少女」の意味するものの変質を、戦後までに亘って論じている。

最初の子ども向けメディアが作文投稿誌（「穎才新誌」）であったのは、学制頒布後の初等教育における作文教育と結びついていたからであるが、学校令の改正とともに文体が言文一致に流れたことと、学齢期の設定によって見える化した子どもたちのニーズが意識されるようになり、改めて社会は「子供とは何か」を考えるようになった。そこに生み出されていったのが、「少年」と冠された雑誌（「少年園」）であった。従って「少年」とは近代特有のものであったが、当初この「少年」は、それがどのようなものかも、またジェンダーも明確ではなかったと、まずは前提となる問題背景が先行研究を踏まえて説明される。ジェンダーの明確化、即ち「少年」から「少女」が分離されて性別ごとに雑誌が生まれていった背景には、中等教育における男女の別学や教育内容の差別化といった、やはり学校教育との連動がある。同じモラトリアム期にあっても、「少年」は「大人」と接続するが、「少女」は前後どちらの時期からも断絶しているがゆえに「希少な時代」として価値をもつものと把握された。そして、1910年代に拡大した都市新中間層の子女が購買層であったことが、雑誌における「少年」「少女」の意味を規定していったとする。新興

メディアである少年少女雑誌の中で、明治期に最も支持されたのは博文館の「少年世界」「少女世界」であったが、これらはやがて後発の実業之日本社の「日本少年」「少女の友」に追い抜かれてゆく。その理由は、後者の方が都市新中間層の価値観・子ども観に合致していたからだ、著者は雑誌投稿者の居住地の分析データを起点に導き出している。つまるところ、「少年」「少女」というタームが示すのは、これら都市新中間層がモデルとする子どもたち像であったことを、著者は指摘する。その内実がどのようなものであったか、韻文・散文・挿絵・読者欄といった、少年少女雑誌の主たるコンテンツをそれぞれ分析することで示してある第Ⅱ部が、本書の力点であるだろう。

中でも興味深かったのは、「第四章 新体詩の名手と口語詩の名手」である。1910年代の「日本少年」では有本芳水による文語定型の長詩が、「少女の友」では星野水裏の口語自由の長詩が、それぞれの読者から大きなリスペクトを得ていた。近代詩史においては既に明治末には口語自由詩の波が訪れており、大正6年にはその完成形と言われる萩原朔太郎の『月に吠える』が上梓される。児童文学における韻文の成果はそれに後して現れると、その時差についてが言われがちだが、本書では、なぜ「少年」においては文語定型が愛され、「少女」には口語自由型が受け入れられたのか、という読者視点に立って考察されている。著者はそこに、教育の有する価値が男女によって異なっていた点を指摘する。即ち、この時期の男女はともに、第Ⅰ部で説明されているとおり「形式主義作文」から「写生主義作文」への教育過渡期にあった。形式主義作文教育は漢文訓読体を主体とした名文を誦んじ、自在に引用することを主としていた。これを得意とすることは「学歴獲得」「職業獲得」に有利となるが、一方女子にとってはこれらを習熟しても活かす先がない。そのため、世代が下った1910年代の男子にとっては、芳水の文語定型詩はなお魅力を感じて見えたが、女子はすんなりと口語自由詩を受け入れていったのだと論ずる。但し、学歴も就職も、「日本少年」「少女の友」いずれの購買層ともに都市新中間層の子女であったからこそ意味を持つのであり、同時に芳水や水裏がテーマとする「悲哀」(抒情)を「理解・表現できる」層であったことも、併せて述べられる。

抒情の授受については、その後の少年少女雑誌の展開と変質にも深く関わる要素となることが、本書を読み進めていく中で理解される。私的領域において抒情の「理解・表現」を重視することは「東アジアの伝統」であったと、著者は先行研究を踏まえて述べる。その伝統に価値を置くのは、「近代社会の知識人層」である都市新中間層であった。このように、抒情に対する意識には階層および地域差があること、抒情をどう捉えるか扱うかは雑誌によって差が生じたが、結果的にはそれによって読者層の拡張にも影響が生じていくことを、本書は少年少女雑誌に掲載された偉人伝の人物像や、少年少女小説のヒーロー・ヒロインに与えられた要素、表紙絵(抒情画)に表現される動作など、多様な素材をもとに説明してゆく。大日本雄弁会の「少年倶楽部」「少女倶楽部」がやがて一人勝ちしてゆくそこには、大都市圏の新中間層のみにターゲットを絞るのではなく、地方在住者および経済的下層にある子どもたちをも取り込もうとする大衆化の姿勢という要因があった。そ

の一方で、「少女の友」は抒情性を保持したことから独自性を維持し、大衆化の力を以て君臨する「少女倶楽部」に対し善戦したと、著者は一定の評価を与えている。

このように、「少年」「少女」は、1910年代には都市新中間層の子どもの有り様を表現し且つ規定する語であったが、1920年代後半になるとこれらの語はより広範囲の子どもをカバーするもの——著者によれば「あらゆる階層の「少年」「少女」——となつてゆく。別の言い方をすれば、「少年」「少女」は明治期から大正期にかけて都市新中間層の志向する「学歴の価値」「階層分化の価値」に支えられて明確化していったが、それらの価値は昭和期以降、文化の大衆化と戦争によって失われた。戦後、男女共学化というまたしても教育の一大転換を受けて、少年少女雑誌は「ジュニア」という新たな語を生み出す。この「ジュニア」は、かつての分化以前の「少年」のごとく、「男子・女子を包含するもの」であったと、著者は分析する。

長々述べたものの、以上は本書の一面からの紹介でしかない。約100年の長期にわたる少年少女雑誌の変動を、社会意識や教育制度、出版社の企画意図あるいは出版社同士の競合、読者との影響関係など、多様な見地から考察したものであり、紙幅の許す範囲でこれらをすべて紹介するには到底至らなかった。また、本書は著者の前著『『少女』の社会史』（勁草書房、2007年）に接続・発展させた論である。著者は「あとがき」で、これまで「『少女』に関する知」が作られた要因と理由について研究し、その後「『少年』に関する知」についても研究を始めたが、やがて「『少年』『少女』は関連し合っているため、単独で明らかにすることはできないことがわかってきた」ことから、本書を執筆したとその経緯を明らかにしている。少年少女雑誌は総覧が難しく、その研究は資料収集の段階から問題を抱える。そういう中で、通時的な「少年」「少女」像を抽出する作業は、たいへんな労力の末になされたものだろうと思う。著者のこの成果に対し、今後隣り合う他分野からもさまざまな知見が付け加えられていくだろうことが期待できる。たとえば各雑誌の読み物における「少年」「少女」像には、やはり作家自身のパーソナリティと理想が仮託されているはずだが、そのような変数をどう絡めて考えるかといったことは、オーソドックスに過ぎるだろうが、文学研究の末端に連なる者としてはやはり気になるところである。また、分析対象の中には例外的要素も有ろう。そうした例外に目を止めてみることも、興味以上に意味があるのではないかとも思う。「少年」「少女」に関する「知」の深化を、これからも注視していきたい。

（ふくだ いちよ 日本語日本文学科准教授）